

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第166集

# 田中館跡発掘調査報告書

東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター

# 田中館跡発掘調査報告書

東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査

## 序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,600カ所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にとりもなう社会資本の充実も重要な施策であります。特に高速度道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として、多方面から期待されるところであります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化財振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、東北横断自動車道秋田線建設に関連して、平成元年度・2年度に発掘調査した田中館跡の調査結果をまとめたものであります。田中館跡は、和賀川右岸に形成された舌状突出部に立地し、調査の結果、土坑や溝等の遺構と縄文時代や古代の遺物が発見され、新しい資料を提供することができました。

この報告書が広く利用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御協力、御援助を賜りました日本道路公団仙台建設局北上工事事務所、北上市(和賀町)教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より謝意を表します。

平成3年6月

財団法人 岩手県文化振興事業団  
理事長 工藤 巖

## 例 言

1. 本報告書は、岩手県北上市和賀町山口40地割18ほか<sup>な ぶらで</sup>に所在する田中館跡の発掘調査結果を取録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、東北横断自動車道秋田線建設に伴って遺跡の一部が消滅するため、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。  
調査は、日本道路公団仙台建設局と岩手県教育委員会事務局文化課との協議・調整を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施したものである。
3. 岩手県遺跡台帳の登録番号はME63-0068、調査略号はTN-89とTN-90である。
4. 調査年度、調査期間、調査面積、調査員は、以下のとおりである。室内整理・報告書作成は、工藤利幸、村上修、及川靖世が担当した。  
平成1年度 4月10日～5月13日 2,570㎡ 工藤利幸 村上修  
平成2年度 9月3日～10月12日 3,410㎡ 佐々木嘉直 工藤利幸 及川靖世 阿部勝則
5. 本報告書に掲載した写真図版の縮尺率は不同である。また、スクリーン・トーン、指示線等の実測図凡例は「Ⅲ. 調査の方法」および各図版中に記載している。
6. 各種鑑定・分析にあたっては、下記の機関・諸氏に依頼した。  
岩質鑑定 佐藤地質工学研究所 佐藤二郎氏  
顔料分析 岩手県立博物館 木村克則・赤沼英雄氏  
炭化材樹種 岩手県木炭協会 早坂松次郎氏
7. 野外調査にあたっては、和賀町教育委員会ならびに地元の方々の御協力をいただいた。
8. 調査に関わる諸記録・遺物等は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

# 目 次

## 序 言

### 〈本 文 目 次〉

I. 調査にいたる経過および調査の経過	1		
1. 調査にいたる経過	2. 調査の経過		
II. 遺跡の位置と環境	3		
1. 遺跡の位置・立地	2. 地形・地質の概略	3. 調査区域の状態	
III. 調査の方法	5		
1. 野外調査について	2. 実測図の表現について	3. 土層について	
IV. 遺構について	9		
1. 微地形と遺構分布	2. 遺構について		
V. 出土遺物について	19		
1. 土 器	2. 石 器	3. 陶器他	4. 土器塗膜顔料分析
VI. まとめ	34		
1. 遺構について	2. 遺物について		
表 1：石器一覧	表 2：顔料の定性分析結果		

### 〈図 版 目 次〉

図版 1：遺跡位置図	3	図版10：H00-002A・B土坑	16
図版 2：土 層 図	6	図版11：I 01-001土坑と出土遺物	17
図版 3：周辺地形と調査範囲	7	図版12：土器実測図(1)	22
図版 4：遺構配置図	9	図版13：土器実測図(2)	24
図版 5：土器埋設遺構	11	図版14：石器実測図(1)	29
図版 6：H02-001土坑	12	図版15：石器実測図(2)	30
図版 7：H02-002、003土坑と出土遺物	13	図版16：石器実測図(3)	31
図版 8：H03-001土坑	14	図版17：石器実測図(4)	32
図版 9：H04-001土坑	15		

〈写真図版目次〉

写真図版1：遺跡遠景……………35	12. H02-001土坑
1. 北々東から撮影	13. H02-002、003土坑
2. 東南東から撮影	写真図版6：土坑写真他……………40
写真図版2：遺跡近景……………36	14. H03-001土坑
3. 雑物除去後の状態	15. H04-001土坑
4. 調査終了間近の状態	16. I01-001土坑
写真図版3：段丘礫積と表層土層の状態…37	17. 土器出土状態
5. H04区の礫層等の状態	写真図版7：土坑と溝……………41
6. F03区の土層堆積状態	18. H04-002A・B土坑
7. H02区の土層堆積状態	19. H03-02溝
写真図版4：遺構分布状況……………38	写真図版8：集石……………42
8. H02-01溝とIII・IV層上部の確認 作業	20. 円墳状集石
9. H02区～I01区の遺構分布状態	21. 同上半截
写真図版5：土坑写真他……………39	写真図版9：土器写真(1)……………43
10. 土器埋設遺構	写真図版10：土器写真(2)……………44
11. 埋設土器復原写真	写真図版11：石器写真(1)……………45
	写真図版12：石器写真(2)……………46

## I. 調査にいたる経過および調査の経過

### 1. 調査にいたる経過

東北横断自動車道秋田線は、北上市から湯田町を經由して秋田市に至る総延長107kmの高速道路である。このうち、第9次・10次施行命令区間は北上ジャンクションから秋田県境までの延長33.9kmである。

これに関連する埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が昭和56年から分布調査を行っており、日本道路公団仙台建設局との間でその取り扱いについて協議された。協議の経過は、以下のとおりである。

昭和62年4月13日付け 「仙建北工第35号」による分布調査の依頼

5月25日付け 「教文第117号」による分布調査結果の回答

昭和63年9月9日付け 「教文第320号」による平成元年度発掘調査事業の照会

9月16日付け 「仙建北工第515号」による平成元年度発掘調査事業の回答

昭和63年12月27日及び平成元年1月21日、日本道路公団仙台建設局、岩手県教育委員会、岩手県文化振興事業団の3者による埋蔵文化財調査に関する協議

これにより、岩手県教育委員会は調整のうえ、柳上遺跡、岩崎台地遺跡群、岩崎城西遺跡、梅ノ木台地Ⅰ・Ⅱ遺跡、兵庫館跡、本郷遺跡、石曾根遺跡、月館跡、八幡館跡、八幡野Ⅱ遺跡、田中館跡、越中畑Ⅴ遺跡の13遺跡、92,000㎡の調査を岩手県文化振興事業団の平成元年度委託事業にすることとした。

これをうけて、当埋蔵文化財センターは、平成元年4月1日付け、委託契約により発掘調査に着手したものである。しかし、梅ノ木台地Ⅱ遺跡と越中畑Ⅴ遺跡の調査は、用地の買収未了や保安林解除の遅延により次年度以降に実施することとした。また、柳上遺跡、梅ノ木台地Ⅰ遺跡、兵庫館跡、本郷遺跡は、同様の理由により調査区の一部を次年度の継続調査とした。これにともない田中館跡と八幡野Ⅱ遺跡の調査面積を増加することとした。

平成2年1月10日 日本道路公団仙台建設局、岩手県教育委員会、岩手県文化振興事業団の3者による埋蔵文化財調査に関する協議

平成2年3月2日付け「教文第731号」による平成2年度埋蔵文化財調査事業の通知

これにより、柳上遺跡、上丸柳Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡、岩崎台地遺跡群、梅ノ木台地Ⅰ・Ⅱ遺跡、兵庫館跡、上反町遺跡、観音館跡、煤孫遺跡、法皇野Ⅰ遺跡、中歴敷遺跡、林崎館跡、本郷遺跡、石曾根遺跡、八幡野Ⅱ遺跡、田中館跡、越中畑Ⅴ遺跡の20遺跡、130,700㎡の調査を実施することとなり、平成2年4月1日付け契約により発掘調査に着手した。

平成2年6月27日付け「教文257号」による平成2年度発掘調査遺跡の変更通知

これにより、新たに岩崎台地遺跡群のME64-2316とME64-2288を追加し、今年度調査予定の梅ノ木台地II遺跡・兵庫館跡・中屋敷遺跡・越中畑V遺跡は次年度に繰り越すこととした。また、観音館跡・上反町遺跡内の未買収地部分は次年度の継続調査とした。なお、法量野I遺跡については粗掘だけとし、精査を次年度に繰り越すこととした。

平成2年11月26日付け「財岩文141号」による平成2年度発掘調査事業の調整の依頼

これにより、一部精査未了の柳上遺跡・上鬼柳I遺跡・岩崎台地遺跡群・煤孫遺跡は次年度の継続調査とした。

## 2. 調査の経過

秋田線建設に関連した田中館跡に対する野外調査は、平成元年度と同2年度にわたって実施された。

元年度は、4月10日の器材搬入・調査事務所の設営に始まり、同年5月15日の器材整備・収納で終了している。当初の調査面積は2,000㎡であり、先づ立木伐採後に残された雑物の除去・刈払と併行して調査区割付の測量を行った。調査区割付の後土層堆積状態・遺物の包含分布状態・遺構確認面などを把握するため40余の小調査区を人力で調査した。その結果、遺物・遺構はF03区とH02区のII層上部に比較的集中することが判明した。この成果を踏まえてパワーシャベルを導入し、人力作業と併行して粗掘・遺構確認・精査へと作業を進めた。検出した遺構は、土器埋設遺構1、土坑5、溝3、柱穴様小穴54である。これらの調査が進む中、4月24日北上工事事務所から調査面積変更の申し入れがあり、文化課等による協議の結果、2,570㎡とすることとした。増加した570㎡の範囲からH04-001土坑とH04-002土坑を確認・精査し、本年度の調査土坑は7、溝3となった。

2年度は3,410㎡を対象として9月3日に始まり10月12日終了している。作業の進め方は、昨年度と同様であるが、礫層の起伏や多数の倒木痕による疑似現象だけであり、遺構は確認されなかった。遺物は、II層上部から土師器の甕、II層下部などから縄文時代前期・後期の土器や剥片を検出した。



## II. 遺跡の位置と環境

### 1. 遺跡の位置・立地

田中館跡は、岩手県北上市和賀町山口40地割18ほか地内で、東日本旅客鉄道北上線横川目駅の南南東約2km、北上市役所和賀支所の南約1.5kmに所在する。国土地理発行の地形図1:25,000「和賀仙人」NJ-54-20-1-1(新庄1号-1)、および1:50,000「川尻」NJ-54-20-1(新庄1号)図幅中の北緯39度17分31秒、東経140度58分57秒付近に位置している。

遺跡が所在する北上市は、北上盆地の中央部から中央西部に広がるかつての北上市、和賀町、江釣子村の3市町村が平成3年4月1日をもって合併誕生した新生「北上市」であり、遺跡所在地はかつての和賀郡和賀町山口地区に位置している。市境の北縁から西縁は花巻市・和賀郡沢内村・同郡湯田町に接し、東縁から南縁は和賀郡東和町・江刺市・胆沢郡金ヶ崎町・同郡前沢町に接する面積437,34km<sup>2</sup>の都市である。東部は北上山地西縁の丘陵地帯でその西側を北上川が南流し、西部は奥羽山脈東麓にあり、奥羽山脈中に源を発する和賀川が東流している。

遺跡は和賀川の右岸(南)に形成された更新世低位段丘である金ヶ崎段丘の舌状突出部を中心に広がっており、その西縁は和賀川の支流である鈴鴨川によって区切られている。調査区域



図版1:遺跡位置図

は、突出部のつけ根付近で西縁から東側の段丘内部140mまでの範囲である。調査区域の標高は131～133m、和賀川との比高は35～37mで、鈴鴨川との比高は19～21mである。調査区域の地目現況は、杉を主体とした林地であるが一部の区域は昭和40年代初頭まで畑地として利用されている。

## 2. 地形・地質の概略

岩手県の地形は、岩手県北部の安代町と西根町との境に位置する七時兩山山麓に源を發し、県中央部を南流して宮城県石巻市で太平洋に注ぐ北上川水系、および岩手県葛巻町袖山に源を發し、葛巻町・一戸町・二戸市などを経て青森県八戸市で太平洋に注ぐ馬淵川水系の両河谷低地帯をはさみ、西は第三紀層の褶曲隆起帯に那須火山帯が重複した奥羽山脈・奥羽脊梁山脈、東は古生界を主とする北上山地が各々南北に伸びている。北上山地の東縁は太平洋に面する陸中海岸地帯となっている。北上市は、岩手県南部で北上盆地の中央部から西部に位置し、市域の東部を北上川が南流している。また、奥羽山脈に源を發する和賀川が西部地区の中央を東流して、古川地区で北上川と合流する。北上盆地は、北上川および奥羽山脈に源を發し北上川に注ぐ幾つかの支流によって造りだされたもので、特に北上川西岸には河岸段丘や扇状地が良く発達している。

和賀地区の地形には北上盆地の特徴が顕著に現われており、西部奥は奥羽山脈に含まれる山地にあり、和賀川の下流域は主に3期に大別される更新世段丘とその縁辺には完新世の段丘として自然堤防や氾濫源を含む河岸平野が発達している。遺跡は、これらの地形面のうち金ヶ崎段丘と呼ばれる更新世低位段丘上に立地しているが、段丘の上を鈴鴨川他による扇状地性の崖錐堆積物がおおっているため地表面には小起伏が見られる。

## 3. 調査区域の狀態

調査開始の直前までは、全域が杉・松などの林地であったが、その一部が昭和40年代初頭まで畑地として利用されていた(写真図版2)。畑地として利用されていた区域では畝跡が観察され、区画毎にわずかな段差が形成されている。旧耕作土からは、陶器・ガラス破片、ビニールフィルムなどが出土した。

### III. 調査の方法

#### 1. 野外調査について

##### (1) 調査区の割付設定

調査区域は東西約140m、南北約55mと道路建設予定地に沿って東西に長く伸びている。調査区の割付設定は、道路公園によって設置されている道路中心杭No87+40とNo86+80の2点を各々基準点1、基準点2とし、2点を結ぶ直線の延長方向を東西の基準線とし、更に基準点1上で直交する方向を南北の基準線として、調査区全体に20×20mの大調査区を設定した。大調査区は更に4×4mの小区画によって25区画に細分した。これら調査区の割付方法、調査区呼称は、隣接する八幡野II遺跡と同一としている。

大調査区の割付は、南北方向を北から南へA～N、東西方向を西から01～36とし、呼称はこれらの組み合わせでF01、G02……などとした。小調査区の呼称は図版2の小調査区割付例とし、大調査名との組み合わせでF01A、～F01Y、などと表示した。

基準点1、2の平面座標第X系による成果値および杭高は以下のとおりである。

基準点1、X=-78798.72395m Y=12802.41868m H=132.500m

基準点2、X=-78806.17366m Y=12861.95382m H=132.298m

##### (2) 遺構確認・精査・記録

小調査区単位の試掘掘削によって土層の堆積状態や遺物の分布状況を確認し、後述する基本土層のII層上面までを重機によって除去した。その後は、人力による粗掘、遺構確認作業とし、確認した遺構には大調査区毎に通し番号を付与した。通し番号は、住居址、大型土坑や溝には2桁の数字を、その他の土坑は3桁とした(例 H02-001土坑、H03-01溝…)

土坑の精査方法は2分法とし、作業の各段階で図化、写真撮影等必要な記録を行い、図化縮尺は、20分の1を原則とした。図化方法は、支距測量と平板測量の2方法で行っている。

#### 2. 実測図の表現について

(1) 各図版の縮尺については、スケールまたは縮尺率を図版中に示している。

(2) 遺物実測図のうち、礫石器、剥片石器については図示困難な使用痕跡の範囲を「——」で示し、摩滅面、摩滅光沢部にはスクリーントーンを貼り付けている。また剥片等の自然面にはドットを落として使用面、あるいは加工面と区別している。

(3) 土器実測図については、赤色顔料を塗布した面と内黒処理を施したものにスクリーントーンを貼り付けている。なお土師器の実測図化は小破片からの復元図化であるため、器形・

推定法量には大きな誤差が生じることがある。

### 3. 土層について

(図版2、写真図版3-5・6・7)

調査区域の現況は杉の造林地および雑木の林で、昭和40年代初めまで畑地として利用されていた所が多い。土層堆積の状態は、04区東側を境にして差異が認められたが、これは段丘構成層あるいは、崖麓堆積物の堆積状態に起因するものである。以下に述べるI~II層は、層厚、混入物の差を除けば全区域ともほぼ同様であるが、III以下は大きく異なっている。

I層：黒褐色土(10Y R2/2~2/3)の旧耕作土層で、地点によっては黒色土(10Y R2/1)も認められるが粘性・締りのない土層である。層厚は20~30cmで、厚い所では上下2層に細分され、薄い所では明黄褐色~褐色土の小ブロックが混在する。また本層の分布は崖麓礫層(磯堤状)の表出した地点を除いてほぼ全域で認められる。

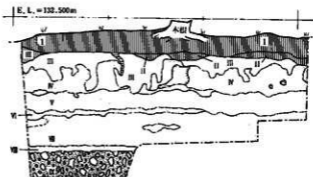
II層：シルト質の黒色土(10Y R 1, 7/1~2/1)で、下部から上部へと明度が漸変し明るくなっている。層厚は、I 01~02区、H02区では15~25cm前後へと厚く、他は10cm前後である。本層中で遺構の存在を識別できるが、平面形の把握は非常に困難である。

III層：シルト~細砂質の灰黄褐色~褐色土(10Y R4/2~4/4)を主体とするが、上下層の自然擾乱によるブロック土の移動や木根痕等の影響による変色のため、色調は一定でない。また砂質分が多くなるほど灰黄褐色に近くなる。層厚は全体的に不安定で0~35cmであるが、F03区~H03区から東側では消失する。本層およびIV層の上面が確実な遺構確認面である。

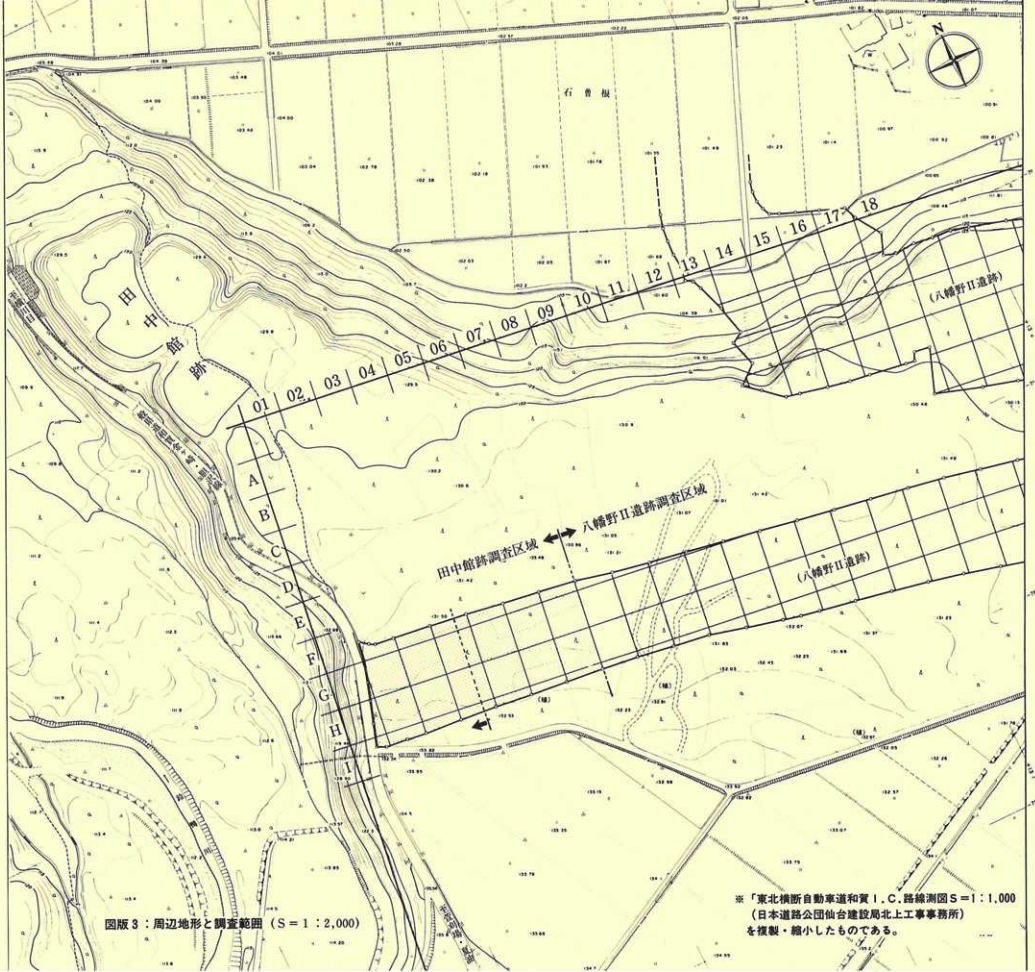
IV層：本層はIII層と同時堆積の異質部の可能性が高い。本層は上位から下位へと粒径が漸変する(シルト~粗砂質砂)。色調は地点によって差異が見られるが全体的に黄褐色を呈し、上部が10Y R6/6~6/8で下部は10Y R5/6~5/8と変化する。

V~VIII層：VI層を除くと黄褐色~明黄褐色、あるいはにぶい黄橙色等を呈するシルト~砂の互層で下位層ほど粗砂、小礫を含む率が高くなっており、VII層下部では小中礫が多く含まれる。VI層は、にぶい黄橙色~明黄褐色(10Y R6/4~6/6)のシルト質粘性土で非常に締りが良い。

IX層：本層は層厚6~8mの礫層で、更に下位には灰色やにぶい橙色の砂層、粘土層が見られるがそれらの層厚は不明である。



図版2：土層図 (S=1:40)

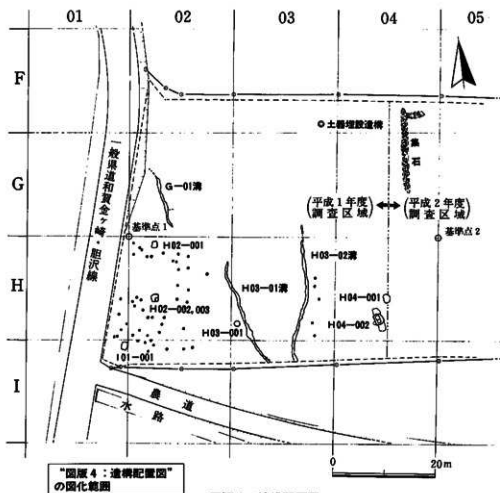


図版 3 : 周辺地形と調査範囲 (S = 1 : 2,000)

※「東北横断自動車道と実1.C.路線測図 S=1:1,000  
 (日本道路公団仙台建設局北上工事事務所)  
 を複製・縮小したものである。

#### IV. 遺構について

2ヵ年にわたる調査で確認した遺構は、縄文時代の土器埋設遺構1基、縄文時代以降平安時代までの土坑7基、近世以降～現代に至る地籍界溝3条、同時代の円墳状集石および石墨状の集石各1ヵ所、極新期の柱穴状小穴群(54穴)である。その他、住居址・土坑と誤認した疑似現象として20数ヵ所の倒木根痕跡について、遺構であるか否かを確認するため精査を行っているが、これについては図化記録は行っていない。



図版4：遺構配置図

## 1. 微地形と遺構分布

(図版3・4、写真図版1、2参照)

調査対象範囲は、西端が鈴鴨川に面する段丘縁辺で急崖となっており、東端は八幡野II遺跡と接している。調査区域全体は南々西～北々東方向へ傾斜しており、その傾斜率は100分の2～100分の2.5である。また、前述の傾斜方向と直交する方向は緩やかな起伏が見られ、この起伏は崖錐性堆積物の礫層部が土堤状に盛りあがっていることに起因し、一部では露出している。また、この礫層は調査区の05区から東側では扇の骨状に南々西から北々東～北東方向に放射状に分布している。04区以西はほぼ平坦である。

遺構は、04区域以西の平坦な区域で確認されている。しかも、地籍界溝を除いた土坑および柱穴様小穴群は南西側のH01～H02区、I01～I02区と南側のH04区に偏在している。縄文時代晩期の土器埋設遺構はF03区に位置し、周辺からは何らの遺構も確認していない。05区から東側には少量の縄文時代の土器・刺片石器・土師器の散布が認められたが、遺構は存在しない。

## 2. 遺構について

各遺構の説明は、土器埋設遺構・土坑・集石・溝の順で説明を進める。なお、54の小穴群については省略する。遺構内出土の遺物については、その都度説明を行うが、\*V、遺物について、の章でもとりあげる。

### (1) 土器埋設遺構

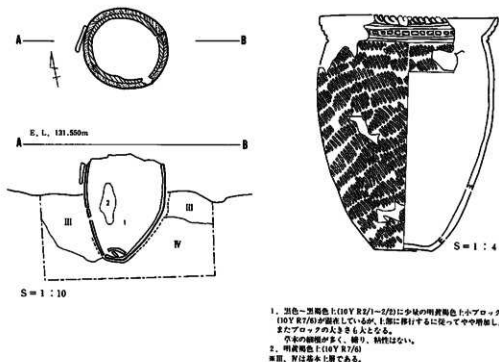
(図版5、写真図版5-10・11)

本遺構はF03-Y区に位置している。遺構の確認は、II層上部までの抜根・粗掘によって埋設土器の口縁部を検出したが埋設している土坑は確認できず、更に周辺土層をIII層上面まで掘り下げて確認した。

土器は、口縁を上にした正立の状態埋設されており、口縁部は破損し一部は周辺および土器内部に散乱していたが、3分の2ほどは不明である。器種は、口縁部が「く」の字状に外折し体部は倒卵形ぎみの深鉢形土器である。文様は、頸部の沈線を境として体部文様帯と口縁部文様帯とに区画されている。体部文様帯は横位施転の縄文RLrだけである。口縁部文様帯は平行する4条の沈線と1段の連続する刻み目が施こされ、口唇は半歯状文の退化した連続小突起と沈線である。復原法量は、器高24.7cm、口径18.4cm、頸部径17.0cm、体部最大径18.8cm、底径6.0cmで、器厚は口縁が5.5～6.5mm、体部5～6mm、底部4～6mmである。内外の器面に観察される炭素付着、熟劣化、変色から煮沸用を転用したものと考えられる。

土坑は、土器よりもわずかに広いだけで土坑壁と土器とが密着した所もある。土坑は、上端形、下端形ともに不整な円形で、確認規模は上端径28×21cm下端径12×10cm深さ17cmである。土器内の埋土は、細別2層に区分したが、2層は明黄褐色土の大ブロックである。1層は全体

的に締りのない黒色～黒褐色土に明黄褐色土の小ブロックが混在しており、炭化物、焼土、その他の遺物は何ら確認されなかった。土坑と土器間の埋土は、明黄褐色～黄褐色のシルト質土を主体とし、東側および下部では黒褐色～暗褐色土が不規則に混在する。なお西側上部は、基本土層と埋土との区別が不明瞭である。



図版 5：土器埋設遺構と埋設土器

(2) H02-001土坑

(図版 6、写真図版 5-12)

本遺構は、H02A区とH02B区にまたがっているが、その大部分はH02-B区に位置している。検出状況は、盛土・第I・II層上部を除去した段階で炭化物・焼土粒を確認したが明確な平面形を把握できないことからIII層上面まで除去している。

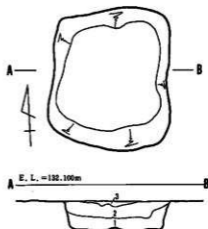
平面形は、上端・下端とも不整な長方形で、底面は凹凸が認められ一様な深さではない。壁の立ち上がり方は部分による差が大きく、東西辺の壁は70度前後の傾斜で直線的に立ち上がっており、南北辺の壁は50～55度の傾斜で立ち上がっている。規模は、上端が140×120cm、下端が110×100cm、深さは25～30cmで全体的に南が深くなっている。

埋土は全3層に区分したが、半截段階では図示した1層の上部に粘性のあるにぶい黄褐色～黄褐色土がうすく堆積していたことから、この層を土坑底面と誤認していた。埋土の1層は



性状の異なる数種の小・中ブロック土が不規則に混在、2層は炭化物・焼土・黄褐色等が不規則に混合した層、3層は黒色～黒褐色土にクリ・コナラの炭化材片を多く含む焼土の小ブロックが散在する層である。

遺物は、埋土中から縄文土器片1点、土師器の甕の破片6点の計7点が出土している。これらは何れも風化の著じるしい小破片であり、器形は推定できないが文様、器面調整はわずかに観察できる。縄文土器片は器厚8mmでLRIの縄文が施こされ、土師器の破片は器厚7～8mmでナデ調整の形跡が観察できる。



1. 上部に粘性のある土質の黄褐色土～黄褐色土 (10Y R 5/4～5/6) が5～10cm連続しているが、他は明黄褐色土、黄褐色土、黒色土の小中ブロックが不規則に混合混在している。粘性なし、締り普通。
2. 炭化物小塊、焼土、シルト質黄褐色土、黒褐色土の不規則な混合土層で、色調は一定でない。粘性なし、締り普通。
3. 炭化材片 (クリ、コナラ) を多く含む黄褐色～暗褐色土 (10Y R 3/2～3/4) で、焼土ブロックが散在する。粘性なし、締り普通。

図版6：H02-001土坑 (S=1:40)

### (3) H02-002土坑

(図版7、写真図版5-13)

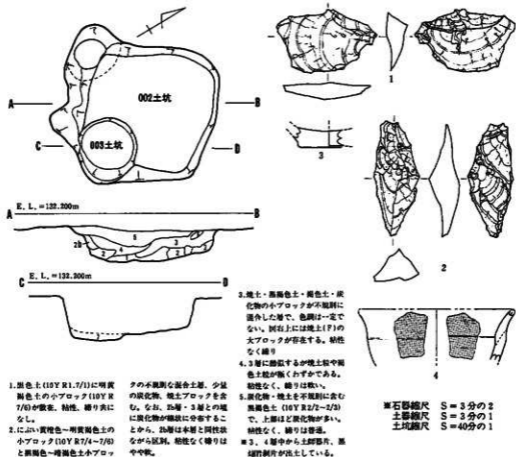
本遺構は、H02L区とH02Q区とにまたがって位置している。確認状況は、II層上部まで掘り下げた所、炭化物・焼土の小ブロックを不規則に含む黒褐色土の分布を確認したが、形状が不整であり平面形を把握できないことからIII層の上面まで掘り下げた。精査の過程で本遺構の西角には径30cm深さ35cmの不整な楕円形の土坑を伴い、南東辺には円筒状の土坑H02-003が重複していることが判明した。

平面形は、上端・下端とも不整な長方形で、底面は若干の起伏が認められ全体的に凹面をなしている。壁は南西壁を除けば80度前後の傾斜で立ちあがっている。南西壁は、壁面に凹凸が見られるものの70度前後の傾斜で立ちあがり、途中で外折したのち内湾状となって上端に達している。規模は、上端が160×140cm、下端が135×125cm、深さは40～36cmである。

埋土は、3層中に存在する焼土層ブロックを除いて6層に細分した。1層は黒色土中に明黄褐色の小ブロックが散在し、炭化物粒を少量含む。2・3層は黄褐色土・黒褐色土等の不規則な混合土で炭化物粒・炭化木片・焼土粒を含むが、3層中の炭化物は30%前後の比率で含まれている。4・5層は黒色～黒褐色土を主体とし焼土粒・炭化物粒を含むが、5層は特に炭化物・炭化木片が多い。全体的に締りは弱く粘性もない。

遺物は、埋土の3、4層から土師器の破片27点、黒曜岩の剝片3点が出土している。土師器

破片の内訳は、坏2個体分8点、甕3個体分19点である。坏の破片のうち同一個体と考えられる4点は内外面に赤色顔料が塗布されている。(図版7-4他3点)。甕の破片は何れも摩耗が著しく調整痕跡は一部にハケメが認められるものの明瞭ではない。



1. 黄褐色土(10Y R1.7/1)に明黄褐色土の小ブロック(10Y R7/6)が散在。粘性、締り共になし。  
2. におい、黄褐色~明黄褐色土の小ブロック(10Y R7/4~7/6)と黒褐色~暗褐色土小ブロッ

クの不規則な混合土層。少量の炭化物、焼土ブロックを含む。なお、25層・3層との境に炭化物が縞状に分布することから、25層は本層と同性質ながら區別。粘性なく締りはやや軟。

3. 焼土・黒褐色土・黄褐色土・炭化物の小ブロックが不規則に混合した層で、色調は一定でない。同右には焼土(F)の大ブロックが存在する。粘性なく締り  
4. 3層に類似するが焼土層や黄褐色土塊が極くわずかである。粘性なく、締りは軟い。  
5. 炭化物・焼土を不規則に含む黄褐色土(10Y R2/2~2/3)で、上層ほど炭化物が多い。粘性なく、締りは普通。  
※3、4層中から土師器片、黒曜石片が出土している。

■石器縮尺 S = 3分の2  
■土器縮尺 S = 3分の1  
■土坑縮尺 S = 40分の1

図版7：H02-002、003土坑と出土遺物

(4) H02-003土坑

(図版7、写真図版5-13)

本遺構は、H02Q区に位置しH02-002土坑の南角に重複した小型の土坑である。確認状況はH02-002土坑の半截作業中、同土坑の埋土4層が一段低く堆積しているのを確認した。しかし、この段階では別土坑の重複を認識するには至らず、更に掘り下げた所ほぼ円形に分布するシルト質明黄褐色土の中小ブロックで構成された埋土7層を確認した。

全体形状は不明であるが、底面は概ね平坦で、壁は下端からわずかに内湾状に立ち上がった後80度前後の傾斜で立ち上がっている。平面形は、壁の立ちあがり方や上端の一部から上端、

下端ともにやや不整な円形を呈するものと考えられる。確認した規模は、上端の径72×70cm、下端の径50×54cm、深さはH02-002土坑より6.5cm深い46.5cmである。

埋土は、上部を掘りすぎたため埋土の7層を確認しただけである。埋土の性状は、シルト質明黄褐色土(10Y R7/6)の中小ブロック構成でブロック間隙を黒色土が埋めている。粘性はなく、締りは良好である。

遺物は、本土坑としてとりあげたものは無いが上位に堆積していたH02-002土坑の4層および3層から土師器(甕・坏)の破片・黒曜岩の剥片が出土している。

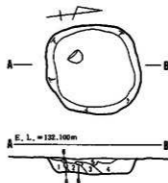
#### (5) H03-001土坑

(図版8、写真図版6-14)

本遺構は、H03U区に位置している。本遺構が位置する周辺では基本土層のⅢ層が極く薄いか欠失している。遺構はⅡ層を除去した段階で焼土粒・炭化物粒を少量含んだ黒色～黒褐色土(埋土5層)の広がりとして確認した。

平面形は、上端・下端とも不整な隅丸方形で、底面には掘り具痕・木根痕による小起伏が認められ全体的に緩やかに波うっている。なお底面の南西寄りには鋤先痕と判断できる半円状の痕跡が存在する(幅16・円弧の半径10cm)。壁は全体的に緩やかな内湾状に立ちあがっているが、一部直線的な所も見られる。規模は上端が100×96cm、下端84×82cm、深さは最大22cm最小16cmである。

埋土は全6層に細分した。1層から4層までは明黄褐色土、黒褐色土、あるいは黒色土等のブロック混合で、それらの割合や大ききで区分した。5層は焼土粒・炭化物粒を含んだ黒色～黒褐色土である。6層は明黄褐色土のブロック土である。何れの層も粘性はなく締りは普通 図版8：H03-001土坑 (S=1:40) かやや軟らかい。遺物は何ら出土していない。



- 1.シルト質明黄褐色土(10Y R7/6)の小ブロックを上部とし、黒褐色土(10Y R2/2-2/3)の小ブロックが混合、粘性なく、締りは強い。
- 2.1層と反対の比率で混合、粘性なく締りは強い。
- 3.2層に混入するが明黄褐色土のブロックがやや入っている。他は同じ。
- 4.シルト質黒色土(10Y R4/1-4/8)に黒色土・黒褐色土・明黄褐色土の小ブロックが不規則に混在、粘性なく締りは普通。
- 5.焼土粒、炭化物粒を極少量含む黒色～黒褐色土(10Y R2/1-2/2)、粘性なく締りは強い。
- 6.シルト質明黄褐色土(10Y R7/6)の大ブロック

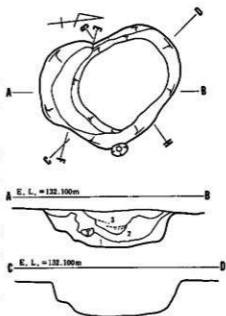
#### (6) H04-001土坑

(図版9、写真図版6-15)

本遺構は、調査区域の中間付近でやや南寄りのH04M区ならびにH04R区にまたがって位置している。確認状況は、切り株の除去とともにⅡ層を除去した段階でⅢ層上面に不整形に広がる黒色～黒褐色を確認し、遺構と判断した。なお土坑の東側の上端縁にある小穴は極新期のものである。

平面形は、上端、下端ともに不整な楕円形で南側は2つの土坑が重複したかのように段差をもっている。壁は各部によって立ちあがり方が異なっているが概ね下端から内湾状に立ちあがり上端付近で外湾するが、南側の段差のある所は若干異なる。底面は小さな凹凸が多く認められ全体的に凹面状をなしている。規模は、C～Dの上端140cm、同下端96cm、A～Bの上端143cm・同下端118cm、E～Fの上端95cm・同下端86cm、G～Hの上端105cm・同下端77cmである。深さは、南側の上段面が24～18cm下段底面は36～30cmで中央付近が深くなっている。

埋土は全3層に大別したが、3層と同質土でブロック状に堆積しているものは3層として別層とした。1層は明黄褐色土を主体としたものに褐色土・黒褐色土等の小ブロックが混在、2層は黒褐色～暗褐色土ブロックを主体としたものに黒色～黒褐色・明黄褐色土等の小ブロックが混在。3層は黒色～黒褐色土で下部にシルト・砂粒の分級が認められる。遺物は出土していない。



- 1.粘性のあるシルト質黄褐色(10Y R 6/8-6/8)ブロックを主体としたものに、黄褐色土や褐色土の小・中ブロック、そして黒褐色土ブロックが混在。  
全体的に粘りがなく、粘性はややある。炭化物散在。
- 2.黒褐色～暗褐色土のブロック(10Y R 3/2-3/4)を主体としたものに黒色～黒褐色土(10Y R 2/1-2/2)に黄褐色・明黄褐色土(10Y R 6/4, 6/8)の大小ブロックが混在。粘り、粘性ややあり。
- 3.細砂質の黒色～黒褐色土(10Y R 2/1-2/2)で部分的に分級が認められる。粘性はなく、粘りは普通か、やや軟かい。

図版9：H04-001土坑 (S=1:40)

#### (7) H04-002土坑

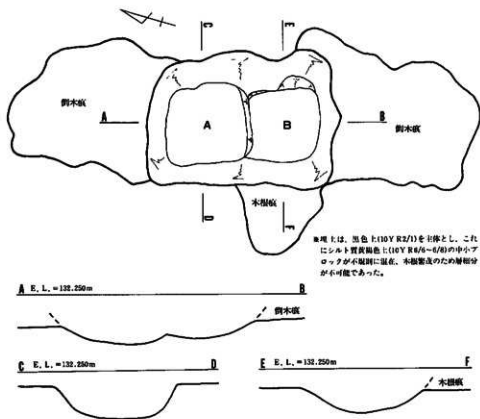
(図版10、写真図版7-18)

本遺構は、H04-001土坑の南々西3～4m付近のH04Q区ならびにH04-R区にまたがって位置している。確認状況は、II層を除去した段階でIII～IV層上面に広がる倒木痕跡を掘りこんだ状態の黒色土の落ちこみを確認した。

平面形は、上端が不整な長方形で、下端は底面と壁との境界が明確ではないが、ほぼ不整な長方形2つが連続した状態であり、2つの面は6cm前後の差をもっている。壁の立ちあがり方は部分による差が大きく、緩やかな内湾状に立ちあがるところと傾斜度40～70度の直線的に立ちあがっているところがある。底面は木根痕、掘り痕による小起伏が見られA・B共に凹面をなしている。規模は、上端が205×144cm、下端Aが86×84cm、下端Bが74×73cm、深さはAが35～26cm、Bが21～23cmである。

埋土は黒色土にシルト質黄褐色土の中小ブロックが不規則に混在した層であるが木根繁茂の

ため細分はできなかった。埋土の堆積状ではA・Bが異なる時期に形成されたものとは判断できなかった。遺物は出土していない。



図版10：H00-002A、B土坑（S = 1 : 40）

(8) I01-001土坑

(図版11、写真図版6-16)

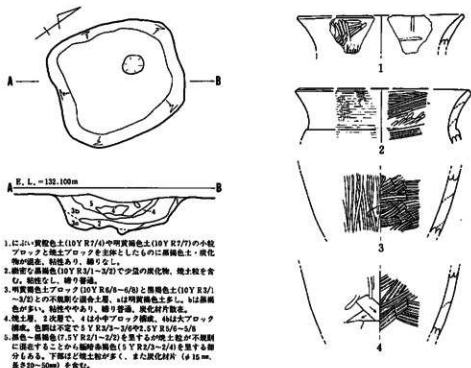
本遺構は土坑の中では最も西端のI01-E区に位置している。検出状況は、盛土、第I層を除去したII層上面の段階で黒色～黒褐色土中に焼土ブロック、炭化物の不規則な分布を確認した。しかし木板痕や自然攪乱のため遺構としての平面計を把握できず、更にII層下部まで掘り下げて平面形を円形と推定し、精査を開始した。

精査の結果平面形は、上端形・下端形とも不整な隅丸方形で、底面は凹凸が激しく一様な深さではない。また底面には中央寄りの北側に径20cm・深さ6cmの副穴状の小穴が設けられている。壁の立ちあがり方は部分による差は見られるが、概ね50度前後の傾斜で立ちあがっている。

規模は、上端が140×126cm、下端が110×100cm、深さは最大38cm・最小31cmである。

埋土は5層に区分している。各土層の性状については註記を参照されたい。

遺物は、図化した土師器の甕の破片を含めて土師器片14点、剃片石器碎片1点が埋土中から出土しているが、図示した4点を除くと何れも極小の破片である。1・2は口縁部付近の破片で3・4は体部下半の破片である。



1. 濃い黄褐色土(10Y R7/4)や明黄褐色土(10Y R7/7)の小粒ブロックと焼土ブロックを主成分としたものに黒褐色土・炭化物が混在。粘りあり、締り強い。
2. 密着な黒褐色(10Y R3/1-2)で少量の炭化物、焼土粒を含む。粘りなし、締り普通。
3. 明黄褐色土ブロック(10Y R6/3-6)と黒褐色土(10Y R3/1-3/2)との不規則な混合土層。aは明黄褐色土多し。bは黒褐色が多い。粘りややあり、締り普通。炭化材料散在。
4. 焼土層。2次層で、4は小中ブロック構成、4bは大ブロック構成。色調は不定で5Y R2/3-3/6や2.5Y R5/6-5/8。
5. 黒色～黒褐色(7.5Y R2/1-2/2)を要するが焼土粒が不規則に混在することから局部赤褐色(5Y R2/3-2/4)を要する部分もある。下部ほど焼土粒が多く、また炭化材料(φ15mm、長さ20-50mm)を含む。

図版11：101-001土坑と出土遺物（土坑実測図S=1:40、遺物実測図S=1:3）

## (9) 集石

(写真図版8-20・21)

集石は、何れも地表で確認したものである。集石の状態は、径2mで高さ70cmほどの円墳状集石と、幅1.0~1.3mで高さ30~50cm、長さ15mほどの範囲に大小礫が盛りあげられた石屋状のものである。調査区内で確認したものは各々1つである。石屋状の集石は、地籍界に沿って形成されており、円墳状集石は倒木等による礫層の浮きあがりの上に形成されている。基底は特に掘りこまれたり造成されてはいない。

確認のため半載等の精査を行った所、礫間から鉄製鍋・山鉾の断片、稻刈鎌、陶器片、ビール瓶の破片、破損した玩具などが採取された。

(10)溝

(図版4、写真図版4-8、7-19)

溝は3条確認した。刈払・雑物除去の段階で確認した地籍界・地目界としての溝とは一致しないものである。しかし、1条を除けばそれらの溝と並行する位置関係にある。確認層位は、II層からIII・IV層上面であり、掘りこまれている層位はII層からIII・IV層であるもののII層中に存在した範囲は掘りすぎなどにより記録できなかつた所が多い。

- ①G02-01溝 旧畑地内に設けられた小径に沿っており、畑地と雑木林との境界位置にある。確認層位はII層下部からIII層上面で、掘りこまれている層位はIII～IV層である。底面は起伏が強く、かつ広狭の変化が大である。埋土は、黒色～黒褐色土にシルト質黄褐色土の中小ブロックが混在する。記録延長9.40m、幅10～40cm、深さ5～20cmである。
- ②H03-01溝 地表で確認した地籍界溝から30～50cm離れた位置にあり、部分的に地籍界溝と交叉あるいは重複が見られる。確認層位はII層上部であるが、平面形状を明確にとらえたのはIII・IV層上面である。掘りこまれている層位はIII～IV層である。底面は起伏が見られ、幅は広狭の変化が大である。埋土は、シルト質～砂質の黒褐色～暗褐色土を主体とし、部分的に黄褐色砂の中小ブロックが混在する。記録延長21m、幅は20～80cmであるが大部分は40cm以下である。深さは10～30cmである。
- ③H03-02溝 H03区からG03区に延びているが底面の起伏が強く、G03区ではII層中に形成されていたことから部分的にしか確認・記録ができなかつた。また、F03区の調査範囲縁辺の土層断面II層でも確認できたことから、F03区にも連続していたものと考えられる。埋土は上部が黒色土で下部はシルト質褐色砂～暗褐色砂、および大小の円礫が混在した粗砂で、これらの砂礫は汚れの少ないものである。埋土中から剥片1点と摩滅した土器底部破片1点が出土している。記録延長26m、幅15～35cm、深さ5～20cmである。

## V. 出土遺物について

出土遺物の総量は、浅いコンテナで3箱ほどである。種類としては、縄文時代の土器・石器。剥片・奈良～平安時代の土師器・須恵器、そして近代から現代にかけての鉄製品や陶器の断片などである。量的には縄文時代の土器・石器・剥片が多いものの、遺溝との関わりをもったものは極一部である。土師器・須恵器は何れも破片で、かつ少量である。しかしながら遺溝との関わりをもつものもある。また剥片石器のうち黒曜岩製品は、出土状態から土師器の一部と密接な関係があるものと考えられる。

### 1. 土 器

土器は、縄文時代前期・同後期から晩期の土器、そして奈良時代・平安時代の土師器・須恵器が出土している。

(1) 縄文時代前期に属する土器片は、2種12点の破片が存在し以下に説明する a は2点 b は10点で同一個体の破片である。

a : 胎土は石英・長石等の砂粒や比較的多くの繊維を含み、器内外面には繊維葉も見られ、胎土の締り、焼成状態は良好である。器外面には0段多条の斜行縄文 LRI が施こされ、内面はナデ調整だけである。器形は不明であるが器厚の変移から深鉢形土器の底部付近の破片と考えられる。器厚は6～10mmである。(図版12-3・4、写真図版9-1・2)

b : 破片10点のうち底部周辺の2点、体部から口縁部にかけての3点は各々接合し、器形を窺うことができる。器形は、平縁・平底で口縁部側が広がるものの概ね円筒状を呈する。口唇は外縁を削られたり撫でたりして内湾状を呈し、底部周辺はわずかながら張りだしている。文様は一切見られないが、外面に縦位方向のヘラ状工具による強い撫で調整が見られる。胎土には、石英・長石等の角礫状の砂粒、その他の小円礫、そして極少量の繊維を含み、締り、焼成とも良好である。内外面には使用によると考えられる炭火物の付着や、2次火熱によると思われる器面の変色、劣化が見られる。復原法量、口径140～150mm、底径120～125mm、器高210～220mmである。器厚は、底部が9～10mm、体部が8～7mmである。(図版12-1・2、写真図版9-3～6)

(2) 縄文時代後期に属すると考えられる土器片は、何れも深鉢形土器の破片および部分復原品である。出土層位状態は、Ⅱ層からⅢ層上部の出土、および住居址等の疑似現象である倒木痕跡からの出土である。これは、無文地に沈線・隆起線による文様が施こされたものと、縄文地



だけのものと大別され、各々は更に細分できる。

①無文地に沈線文・隆起線文を持つもの

- a. 深鉢形土器の底部寄りで、無文地に3条の平行沈線が文様を形成するものである。沈線は底部にほぼ平行する一群と、その上端線に接して斜行して上る一群とが観察ができるがどのような文様構成となるのかは不明である。沈線は広狭の差は見られるが断面形は何れも半円状を呈する。外面は、風化による荒れも見られるものの全体的に縦方向に研磨されており、底面には研磨以外の調整、その他の痕跡は認められない。内面は、撫で調整の後に棘い研磨調整が施こされている。現存法量は、底径98mm、器高84mm、器厚4～8mmである。(図版12-6、写真図版9-7)
- b. aと同様、深鉢形土器の底部よりの破片で、無文地に底部縁辺と平行する1条の隆起線が施こされている。器面は、内外面ともに風化が著るしく器面調整の種類・状態等は不明瞭であるが、外面に研磨痕と内面に撫で痕跡が認められる。また、底面には葉脈痕と思われる沈線状圧痕が見られる。現在部は底部円周の5分の1程度で推定径100～105mm、現在高80mmである。(図版12-9、写真図版9-9)

②縄文以外の文様が認められない土器は、出土状態・地文の種類・胎土の状態によって以下の5種に細分した。なお、器種は何れも深鉢形土器と同破片である。

- a. 胎土の調整・焼成とも非常に良好で色調は灰色～灰白色を呈するもの(図版12-13・14、写真図版9-13・14)。器面にはやや不整な縄文LRIを縦位に施こした後、荒い研磨調整を行っている。そのため浅い条は消されぎみで深い条が燃糸文様に残っている。器厚は5～7mmである。
- b. (図版12-5・10、写真図版9-8・9)は、同一地点のII層下部から積み重なった状態で出土していた(写真図版3-6)。器形は底部縁辺に若干の差異はあるが、何れも深鉢形土器の下半～底部付近である。地文は縄文LRIで横位回転による施文を原則としているが(図版12-10)は底部縁辺だけを縦位回転としている。内面は、ヘラ状工具による撫で調整となっているが研磨調整ほどの緻密さは見られない。胎土は何れも焼成良好であるが砂質で砂粒の状態は亜角礫～円礫状態である。また、両者とも煮沸用途であったもので外面には2次火熱による変色・炭素吸着が、内面には焦げつきによる炭化物膜が認められる。現存法量は、(図版12-5)が底径70mm・器高115mm・器厚4～5mm、(図版12-10)は底径75mm・器高160mm・器厚4～6mmである。
- c. 個体は異なるが、地文である縄文がRLrのもの2点(図版12-15・16)。胎土の調整・器面調整は、ほぼbと同様であるが、内面の風化が強い。器厚は、15が4mm、16が6～7mmである。

d. (図版12-17・18、写真図版9-15・16・22・33、10-24) 他80点は、H06区の倒木痕跡である凹地から出土したもので(写真図版6-17)、当初堅穴住居址と考えて精査を進めた所である。調査の結果、基本土層の逆転が確認され、遺物(土器片・石鏃)の分布状態も土層の逆転に沿ったものであった。出土土器は2個体分の破片であるが、何れも器形を推定できるほどには復原できなかった。

図版12-17(写真図版9-16・22・23、10-24)は、緩やかな波状口縁を呈する深鉢形土器と思われるもので同一破片点数75点が出土している。外面は、強い撫で調整の後に縄文が施こされている。縄文は粗い繊維を用いたLrで、部位により原体の回転方向が異なっている。内面は、良く撫でられており、胎土は比較的緻密であるが長石・石英・その他の砂粒・小礫を多く含んでいる。砂粒鉱物は、歪角礫状のものが多く、小礫は円礫状である。なお、体部上半の外面には炭化物の膜が付着し同下半は変色および器面の荒れを生じている。器厚は5~7mmと変化が見られる。

図版12-18(写真図版9-15)は、深鉢形土器の体部下半と考えられる破片である。同一破片と考えられるものは5点出土しているが、図示したもの以外は小破片である。器外面には炭化物膜が厚く付着しており、文様は縄文RLrである。内面は良く撫でられ、胎土の状態・混和材等は(図版12-17)と同一である。器厚は4~6mmである。

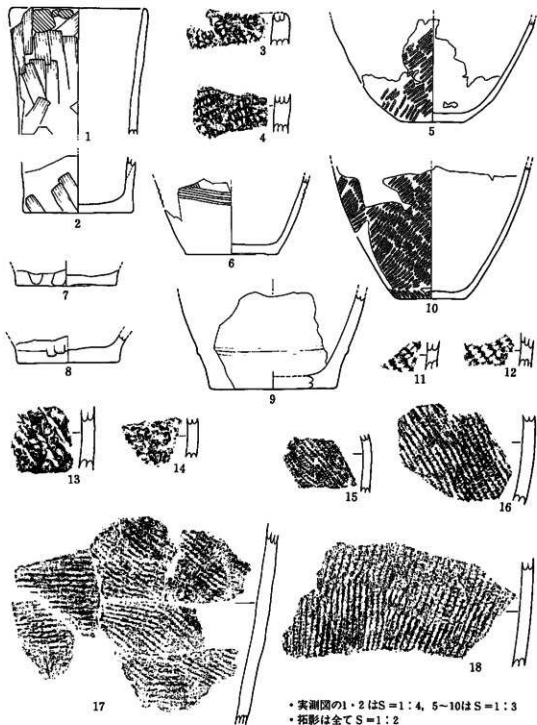
e. 底部破片で胎土調整の状態・混和材の種類からdの一群に近似するものである。底部周辺には粘土帯接合時の指頭圧痕が見られ、底面には撫で調整が見られる。底径80mm・器厚7~10mm。(図版12-7、写真図版9-17)

(3)縄文時代晩期の土器は、遺構説明の土器埋設遺構の稿で説明しているが、若干補足する。口唇部の連続小突起と突起間の沈線は、下位に平行する沈線の最上位に接するもの、接しないもの、あるいは突起間と突起間とを半円状に結ぶものなどが不規則に混在している。胎土には、15~20%程度の粗砂質と極少量の小円礫が混和されているが、均質に調整され締りが良好な粘土質土である。焼成状態は、2次火熱による劣化・脆弱部が認められが、良好である。

(4)土師器・須恵器・奈良~平安時代と考えられる土器としては、土師器の坏・甕、須恵器の坏がI層~II層上部、および土坑の埋土から出土している。これらは何れも小破片である。

①坏 土師器・須恵器ともに出土している。遺構と関連のあるものは土師器であり、須恵器の坏は旧耕作土(I層)や調査区外からの採取資料である。これらは何れも小破片であり、復原器形・推定法量には大きな誤差が見られる。

a. 赤色顔料塗布の坏……H02-002・003土坑の埋土から同一個体の破片と考えられるもの4



図版12：土器実測図(1)

点、G03-G区・H02L区のII層上部や木根による攪乱部から2点の計6点が出土している。

(図版7-4、13-1・2他、写真図版10-25・26・29・32)他。これらは、胎土状態・器形からは2個体分の破片と考えられるが、器面調整の状態を見ると3個体分の可能性もある。

図版7-4は内外面に顔料が塗布され、口唇部の下位25mm付近に段をもっている。段から口唇にかけて内外ともに外反し、段から下位は緩やかに内湾している。推定器形は口径に比べて器高の高い杯である。器面調整は塗膜によって明瞭ではないが、内外面とも横ナデを主体とし部分的に斜位のナデ調整が窺える。塗膜形成の方向は何れも横方向である。また成形方法は、断口面で観察された粘土帯接合部の存在から輪積、あるいは巻き上げによるものと考えられる。胎土は、細砂質土で少量の粗砂質を含む。推定口径13~15mm。器厚8.0~4.5mm。図版13-1は内外面横に顔料が塗布され口唇部から下位25mm付近には内外とも段を持っている。段から口唇にかけては内外ともに外反しているが、段から下位は緩やかに内湾している。推定器形は口径に比べて器高が高い杯である。器面調整は塗膜が剥落している外面ではハケメ調整が認められ、その上に顔料が塗布されている。内面は塗膜時の刷毛移動方向と考えられる横位のナデ痕跡だけである。成形方法は、粘土帯接合部の存在から輪積、あるいは巻き上げによるものと考えられる。胎土はシルト質で少量ながら不規則に粗砂粒~小礫を含む。推定口径13~14.5cm、器厚8.5~5.0mm。

図版13-2は前2例と同様に内外面に顔料が塗布され、外面の口唇部から下位27~30mm付近に明確な段ではないが強い屈曲部をもち、内面は緩やかに屈曲している。推定器形は前2例と同様に口径に比べて器高が高い杯であるが、底部形態は不明である。器面調整は、塗膜によって明瞭ではないが外面には横ナデと縦位・斜位の細いヘラナデが疎らに見られる。内面は横位のヘラナデと部分的に斜位のヘラナデが見られる。成形方法は前2例と同様と思われるが明確ではなく、胎土は緻密な粘土質土に10%程度の粗砂~小礫を含み、その砂礫粒は亜角~亜円礫状の摩滅である。推定口径12~14cm、器厚5.5~4.4mm。

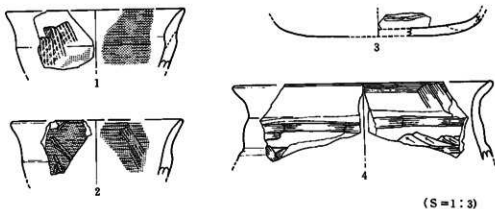
- b. 器面に顔料塗膜や黒色・研磨等の処理調整が見られない土師器、杯の小破片3点であるが器面の風化が著しく処理調整は不明である。器形は図13-3に近似する平底で、底部から口縁にかけては内湾状に立ちあがった後、外反している。成形方法は巻き上げ、あるいは輪積によるもので、胎土はシルト質土で砂粒、小礫は全く見られない。器径・底径・器高は不明で、器厚は3~4mmである。
- c. 内面を研磨および黒色の処理調整を施こした土師器の破片1点である。(図版13-3・写真図版10-42)内面全体にミガキ調整、黒色処理がなされ、外底面はヘラケズリ調整となっている。器形は底部が平底で、底部から口縁方向へ緩やかに内湾し、立ちあがっているが、口縁の形状は不明である。成形方法は巻き上げ、あるいは輪積によるもので、胎土は中・粗砂

が少量混和された締りの良いものである。出土地点等は調査区外のF03-Q区I層である。器厚4~5mmで、他の法量は不明である。

- d. 須恵器の坏は、何れも小破片で4個体分6点の破片である。2個体分の2点は巻き上げ等の成形の後、ロクロによる整形・調整を行っているが器形は不明である。器厚5~6mmで他の法量は不明である。他の2個体分も、ロクロ成形・調整によるもので底面はヘラナデ調整が施こされた平底である。身は底部から口縁にかけて直線的に外傾し、口唇付近で若干外反しているが、詳細な器形・法量は不明である。器厚は、底部が3~4mm、身の厚さが2~3mmである。(写真図版10-40)

②壺 何れも土師器である。出土地点はI01-001土坑の埋土、H05-I05区II層上部、その他旧耕作土であるI層からで他の遺構からは出土していない。全破片98点で、固体数は口縁部周辺や底部周辺の形態、あるいは体部の器面調整の在り方から5個体分の破片と思われる。

- a. I01-001土坑出土の壺破片14点は、口縁部形態・器面調整の状態から同一個体の破片と考えられる(図版11-1~3・写真図版10-28・31・33)。成形は輪轆あるいは巻き上げによるもので、内面の口縁部周辺は横位~斜位のハケメ調整の後に疎らにミガキ調整を施こし、体部下半はハケメ調整のままである。外面の口縁部は縦位のハケメ調整の後に横ナデ調整を施しており、体部は全体的に縦位のハケメ調整の後に縦位のミガキを施こしているものの底部周辺では不規則なケズリ調整も見られる。ミガキ調整の状態は細かく緻密である。器形全体は不明であるが推定法量・器形は、口径145~155mm・頸部径120~130mmで体部は倒卵形ぎみの器形となるようである。器厚は体部が6~7mm、口縁部が4~5mmである。胎土は15%前後の粗砂と極少量の小礫を混和した粘土質土を用いており、締りが良く焼成も良好である。
- b. I05-E区のII層上部から70余点がまとめて出土しているが、同一個体と考えられる破



図版13：土器実測図(2)

片はH05区のI層からも出土している。H05区から出土したものは摩滅風化が著しく、器面調整は不明瞭である。成形は輪轍あるいは巻き上げによるもので内面には接合部が見られる。内面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部直下には部分的にヘラナデあるいは強いヘラナデ様調整が認められるが、体部は底部付近まで横位のヘラナデ調整が施こされている。外面の調整は、口縁部から頸部が横ナデ、体部は縦位のハケメ調整の後、ヘラナデ調整が施こされている。器形推定が復原はできなかったが、各部位の破片計測から器形は口径が肩部と同じかやや小さく、体部形状はやや長めの倒卵形となるようである。胎土はシルト質粘土に少量の粗砂・小礫を混和したもので、締り・焼成ともに良好である。(写真図版10-38)

- c. H05-Q区のI~II層上部を中心として出土した破片18点で、口縁部破片・底部破片を含んでいる。一部の破片は前述のbと混在していた。成形は輪轍あるいは巻き上げによるものである。内面の調整は、口縁部から頸部にかけてはハケメ調整の後、横ナデ調整が施こされているが、体部から底部は横位のハケメ調整だけである。外面の調整は、口縁部が横ナデ調整で、体部から底部周辺にかけては縦位のハケメ調整であるが、底部周辺には部分的にヘラナデ調整も重複している。底面にはヘラナデ調整と単子葉植物茎の圧痕が不規則に見られるが、植物の種類は不明である。形状推定が可能なほどには復原できなかったが、各部位の破片計測から器形は口径が130~140mm、頸部径100~105mm、体部最大径140mm前後、底径80mmの倒卵形と考えられる。器厚は体部が6~7mm、口縁部が4~5mmである。なお、口縁部形態は頸部に強く外折した後、内湾している。胎土は、シルト質粘土に少量の粗砂を混和したもので、締り・焼成とも良好である。(写真図版10-36・37・39)
- d. その他、2個体分の体部破片を一括する。1つは、内面がヘラナデ調整で外面はハケメ調整だけのもの3点。これらは器厚が6~8mmがあるが、器形は全く不明である。胎土はシルト質粘土に10~15%の粗砂を混し、焼成は良好である。他の1つは、内面はナデ調整、外面はヘラナデ調整による肩部付近の破片1点、器厚は3.5~4mmであるが器形は全く不明である。胎土はシルト質土に中砂質砂を少量混和している。(写真図版10-35・41)

## 2. 石器

石器・石製器、および剥片は計48点出土しており、図化掲載したもの30点、写真掲載31点である。出土地点、法量、岩質については一覧表を参照されたい。

### (1) 石 鏃

(図版14-1・2、写真図版11-1・2)

石鏃は2点出土している。1点は両面加工の凸基有茎石鏃で、他の1点は凹基無茎石鏃であるが先端側約3分の1と1翼を欠損している。素材は何れも小剥片で、図版14-1は一部に自

然面を残している。調整加工は、両者とも押圧剥離を主体としており、図版14-2はやや不規則な調整加工である。

## (2) 振器

(図版14-3、写真図版11-3)

明らかに振器と言えるものは1点だけである。横長の黒曜岩剥片の1端に深く平行する調整剥離によって小さな刃部を形成している。また、他の1端および内湾する剥片端には使用による小剥離を併せもっている。

## (3) 不定形石器

剥片の一端、あるいは一部に加工調整が加えられ刃部が形成されているものの器種を特定できないもの4点が存在する。(図版14-4・8、15-12・17-25、写真図版11-4・9、12-19・27)

- ①図版14-4 背面に調整剥離面と自然面とをもつ縦長剥片の先端に刃部が形成されており、刃部形成のための加工調整は浅く急な角度でなされている。剥片剥離後の加工は、刃部形成だけで器形整形の加工調整はなされていない。刃部の角度は87度前後である。
- ②図版14-8 縦長剥片の背面左縁と腹面端右側にウロコ状の剥離によって刃部が形成されている。また背面右縁の一部には使用による剥離が見られる。
- ③図版15-13 背面のほとんどに自然面を残す厚く棒状を呈する残核状剥片の2側縁に荒く疎らな加工が施こされているが、その加工はウロコ状の浅いもの、押圧剥離様に見えるもの、あるいは潰し加工状のものなどが不規則に分布している。
- ④図版17-25 残核状素材の一突出端周辺にわずかな調整加工を施こし、その突出部を刃部としている。刃部そのものには調整加工が施こされていないが、使用による小剥離と摩滅が認められる。

## (4) 使用痕跡の見られる剥片

使用痕跡と考えられる現象は大きく2種類が存在し、これらは何れも2次調整加工をもたないものである。1つは剥片の一部に使用による剥離が見られるものと、もう1つは使用による摩滅が見られるものである。

- ①剥離の見られるもの(図版15-14、図版16-16、17-27、写真図版11-17・16、12-30) 図版15-14は剥片端側の直線状を呈する部分の背面側に急角度の剥離が連続しており刃部角は62度である。図版16-15は剥片端の狭い部分の背腹面に不規則な剥離と潰れ現象が見られる。剥片端の角度は約50度である。図版17-27は腹面左の外湾する部分に不規則な小剥離が見られるが、この剥離が使用によるものか、その他の原因によるものかは判断がつかない。

②使用による摩滅が見られるもの(図版14-6・9、15-10・12、写真図版11-5・10・11・13)図版14-6は、左縁辺には僅から使用による小剝離と摩滅が認められが顕著なものではない。摩滅および摩滅光沢の見られるのは背面の内部と基端腹面側である。基端部の断面角は約81度である。

図版14-9は、外湾する縁辺の実線部が摩滅し丸くなっており、破線部には不規則な小剝離がみられる。

図版15-10は、背面の下端部が摩滅し、その上部の高い部分にも摩滅が見られる。なお摩滅縁辺の両端には、調整によるものか、使用によるものかは不明であるが、不規則な小剝離が見られる。刃部角は約87度である。

#### (5) その他の剥片

調整加工或使用痕跡の認められない剥片には、剥片の一部が折損しているものと、そうでないものがある。折損しているものは、意図的に折断したものか、その他によるものかは不明である。

①折損面をもつもの……図版15-14、16-20・21写真図版11-17、12-20・22

②その他の剥片……図版14-1・2、14-7、16-17・18・22、17-23・24・26他  
写真図版11-1・2・8・15・18、12-26・28・21・25他

#### (6) 石核

石核(残核)と考えられるものは、図版14-5、16-19、17-25の3点である。17-25は一部の調整加工と使用痕跡とから不定形石器の稿に入れているため本稿では除外した。

①図版14-5(写真図版11-4)黒曜岩の残核で残核面に見られる剥片剝離面(陰)の形状は、剥片長10~15mm、剥片幅10~18mmの小形剥片が作出されている。

②図版16-19(写真図版12-19)板状円礫を母材とし2面に自然面を残す残核である。短軸方向の両端から両面に向かって剥片剝離がなされている。作出された剥片の形状は、横長である。更に、左図の右縁では下方からの剝離がなされているが、この剝離は打面再成を目的としたものか否かは不明である。

#### (7) 砥石

(図版15-11、写真図版11-7)

砥石は破片1点が出土している。破片の法量は長さ64mm、最大幅20mm、厚さ8mmほどで、2面の使用面が存在する。残存部から判断する砥石としての形状は、板状に剝離する性質を利用して打割・敲打によって板状に成形されている。使用面の一つ(平面)は深さ7~8mmまで摩耗



してその横断面形は円弧をなしている。側面は平坦な面である。各々の面には光沢と細い線条の痕跡とが見られる。

### (8) 礫 器

(図版17-28, 写真図版12-31)

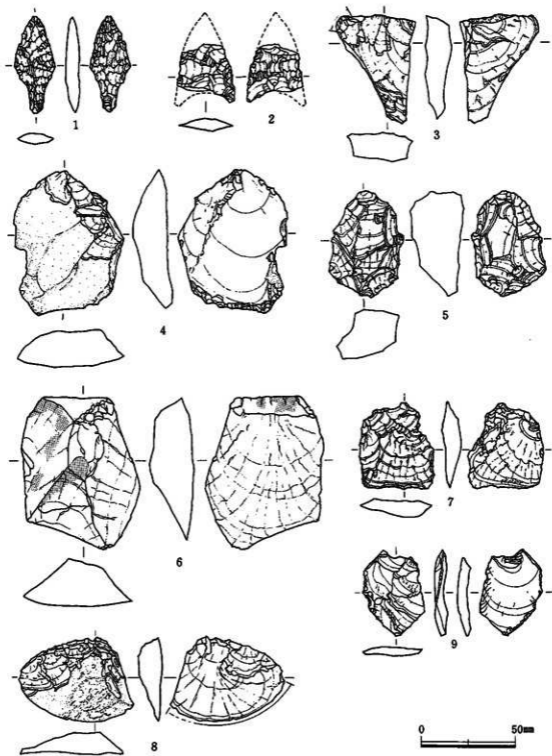
礫器は磨石1点だけである。偏平ぎみの極円礫を用いており、作用面は1面だけである。作用面の状態は図のスクリーントーンの範囲が摩滅し、一部には光沢も認められる。

## 3. 陶 器 他

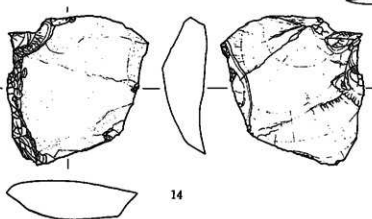
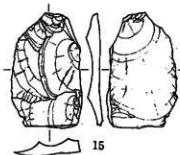
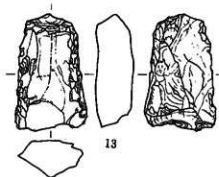
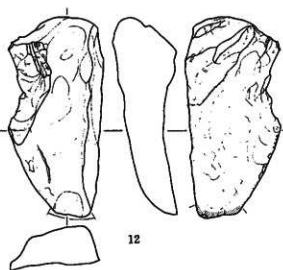
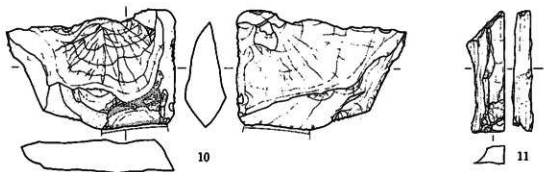
陶器は何れも近代から現代にかけてのもの小破片であり、陶器片・鉄製品・ビールビン等の出土地点・層位は集石中や旧耕作土層からである。

表1 石器一覧表

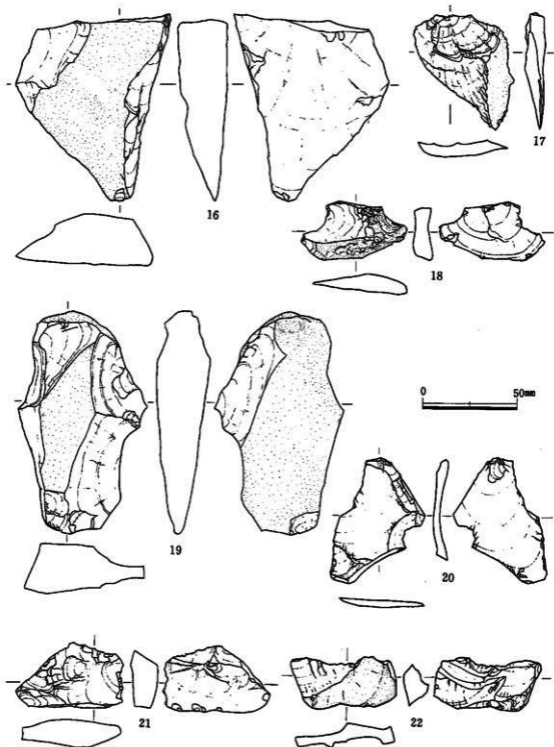
表1	図 順	写 真 縮 原	出土区・層位等	種 類	法 量 (単位mm, g)				物質・産地・生成年代	備 考
					長	幅	厚	重量		
1	14-1	11-1	H5a1層(黒色土)	石錐	25	11	4	0.60	鹿波谷・奥羽山地・新第三系中新統	
2	14-2	11-2	H06K-II	石錐	13	14	3	0.63	玉ずい・産地・時代不明	欠損
3	14-3	11-3	H02-K-IVa	磨石	36	27	8.5	8.65	鹿波谷・産地・時代不明	
4	14-4	11-6	G05-E-II		74	57	19	75	陸奥龍胆湖灰岩・奥羽山地・新第三系中新統	
5	14-5	11-4	G02-G-II	石核	37.5	24.5	19	15.98	鹿波谷・産地・時代不明	
6	14-6	11-5	H04J-IIa層		80	61	25	100	船板谷・夏油川・古生界	
7	14-7	11-8	G03-V-IVa		30	26	6.5	4.65	鹿波谷・産地不明	
8	14-8	11-9	F02-DE-II	削片	45.5	60	12	31.85	鹿波谷・産地不明	
9	14-9	11-10	F06T-II	R, 削片	41	31	6	7.15	陸奥龍胆湖灰岩・奥羽山地・新第三系中新統	
10	15-10	11-11	H06J-IIa層		60	89	22	119	船板谷・夏油川・古生界	
11	15-11	11-7	H0a1層(黒色土)	礫石(有)	54	20	9	11.8	陸奥龍胆湖灰岩・奥羽山地・新第三系中新統	
12	15-12	11-13	G05K-II		194	48	33	170	船板谷・夏油川・古生界	
13	15-13	11-14	H05X-IIa層	?	51	37	19	48	陸奥龍胆湖灰岩・奥羽山地・新第三系中新統	
14	15-14	11-17	G06-I-IIa		74	74	23	140	船板谷・夏油川・古生界	
15	15-15	11-22	F03-V-III		59	37	10	19.85	鹿波谷・奥羽山地・中新統	
16	16-16	11-16	H06J-IIa	片刃石錐	96	72	26	170	船板谷・夏油川・古生界	
17	16-17	11-15	G06J-IIa層	削片	56	49	8	19.9	陸奥龍胆湖灰岩・奥羽山地・新第三系中新統	
18	16-18	11-18	G06a-II	削片	30	53	10	14.8	陸奥龍胆湖灰岩・奥羽山地・新第三系中新統	
19	16-19	12-19	G04J-II	磨石上面	117	68	28	185	陸奥龍胆湖灰岩・奥羽山地・新第三系中新統	
20	16-20	12-20	H05P-I層目録	削片	45	54	5	12.7	陸奥龍胆湖灰岩・奥羽山地・新第三系中新統	
21	16-21	12-22	H05P-II層目録	削片	34	56	14	31	陸奥龍胆湖灰岩・奥羽山地・新第三系中新統	
22	16-22	12-26	H07-E-IIa	削片	54	27	13	16.7	船板谷・夏油川・古生界	
23	17-23	12-23	(I)黄土905	削片	66	59	14	51.6	船板谷・夏油川・古生界	
24	17-24	12-21	G07A-IIa	削片	41	27	9	6.5	陸奥龍胆湖灰岩・奥羽山地・新第三系中新統	
25	17-25	12-27	G06-S1層(黒色土)	刃錐	51	122	41	600	船板谷・夏油川・古生界	
26	17-26	12-25	H03-IV層	削片	37.5	53.5	11.5	40.15	鹿波谷・陸奥龍胆湖灰岩・奥羽山地・中新統	
27	17-27	12-30	H05-IIa層(黒色土)	削片	84	39	26	54.95	船板谷・夏油川・古生界	
28	17-28	12-31	H04-B-III	磨石	84	89	45.5	376	倉内閃石アイサイト・奥羽山地・中新統	
29	—	12-28	M01-901土坑	削片	25	17	4	1.8	陸奥龍胆湖灰岩・奥羽山地・新第三系中新統	
30	7-1	12-29	H07-002土坑		2.2	3.5	0.8	4.18	鹿波谷・産地・年代不明	
31	7-2	12-24	H07-002土坑		4.0	1.6	1.6	4.8	鹿波谷・産地・年代不明	
32	—	—	H06J-IIa	削片				(2.175)	船板谷・夏油川・古生界	17点抜き



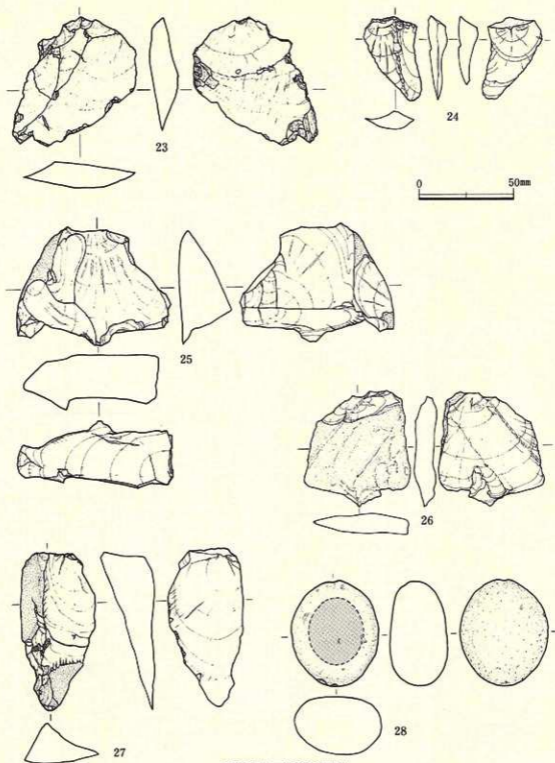
圖版14：石器測圖(1)



图版15：石器实测图(2)



图版16：石器实测图(3)



图版17：石器实测图(4)

## VI. ま と め

### 1. 遺構について

- (1) 田中館跡に関連する遺構・遺物は、何ら検出していない。
- (2) 土器埋設遺構は、縄文時代晩期の大洞B-C式期末~C-1式期初頭であるが、用途・目的は不明である。

(3) 7基の土坑は、形態・埋土の性状・出土土器の種類から大別3期に区分できるが、明確な時代、時期の判定は困難である。また、用途・目的については何れも不明である。

I期：基本土層のII層が土坑の上位を被覆しており、そのII層には攪乱や二次堆積の痕跡が認められないことからII層形成過程の初期に土坑が形成されたものとする。この特徴に属するものはH04-001土坑とH04-002土坑である。時代・時期は、土器埋設遺構よりも明らかに古く、周辺からの出土土器と比較すると縄文時代前期の土器群に近いものである。

II期：II層上部を除去した段階で平面形状を明確にした土坑は、H02-001土坑、H02-002土坑、I01-001土坑がある。またH02-003土坑はH02-002土坑よりも古い埋土の性状からは大きくかけ離れたものではない(II-1期)。前3基の土坑とは、非常に近い時期か同時期に形成されたものとする。その時代時期は7世紀頃と考えられる(II-2期)。

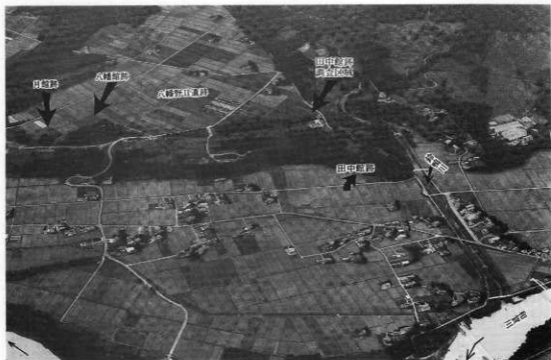
III期：H03-001土坑は、底面に残されていた鋤先痕から古代以降~近代までの間に形成されたものと考えられるが、詳細な時期は不明である。

- (4) 溝・集石は、地籍界および地目界に沿っていることや、隙間からは近代・現代の器具等が出土していることなどから近代以降・現代にかけて形成されたものと考えられる。

### 2. 遺物について

遺物は、土器・石器ともまとまりのない出土状態、出土量であり、詳細な時代時期の判定は困難である。ここでは土器について、その推定時期を記す。

- (1) 縄文時代前期と考えられる土器は、大木I式前後と思われるが、判定はしかねる。
- (2) 縄文時代後期に属すると考えられる①-a・bと②-a・bは、沈線文・隆起線文の使い方、そして胎土の特徴から後期前葉と考えられ、②-c・dは縄文の特徴から後期後葉と考えられる。
- (3) 晩期の埋設土器は、羊歯状文の退化と突起下の不規則な沈線文の存在から大洞B-C式末か同C-1式初頭と考えられる。
- (4) 土師器と須恵器は、奈良時代および平安時代のものである。土師器のうち赤色顔料塗布の坏と伴出したカメは、ほぼ7世紀頃と考えられ、他のクロロ使用土師器・須恵器は10世紀後半から11世紀初頭にかけてのものとする。



1. 北々東から撮影



2. 東南東から撮影

写真図版1：遺跡遠景



3. 雑物除去後の状態



4. 調査終了間近の状態

写真図版2：遺跡近景





5. H04区の礫層等の状態



6. F03区の土層堆積状態

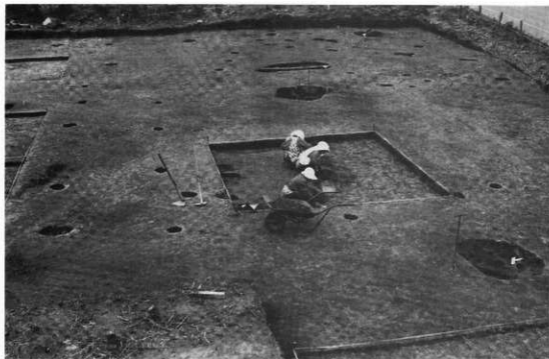


7. H02区の土層堆積状態

写真図版3：段丘礫層と表層土層の状態



8. H02-01溝と田, IV層上部の確認作業



9. H02区～101区の遺構分布状況

写真図版4：遺構分布状況



10. 土器埋設遺構

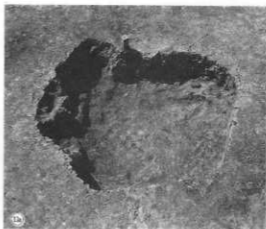


⑪

11. 埋設土器復原写真



12. H02-001土坑

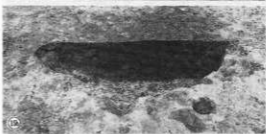
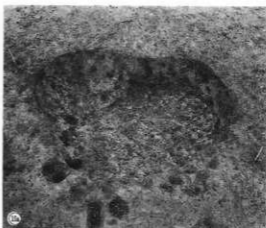


13. H02-002, 003土坑

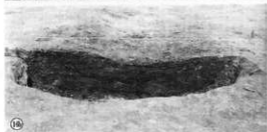
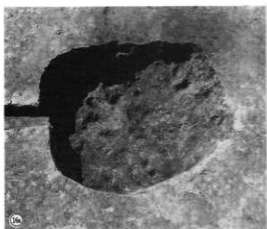
写真図版 5 : 土坑写真他



14. H03-001土坑



15. H04-001土坑

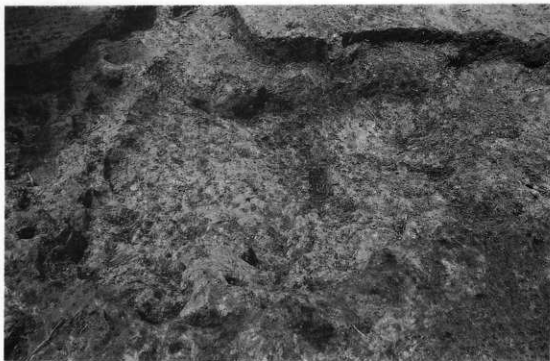


16. I 01-001土坑

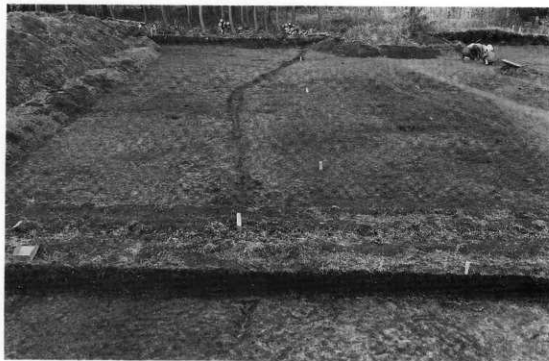


17. 土器出土状态

写真图版 6：土坑写真他



18. H04-002A・B土坑

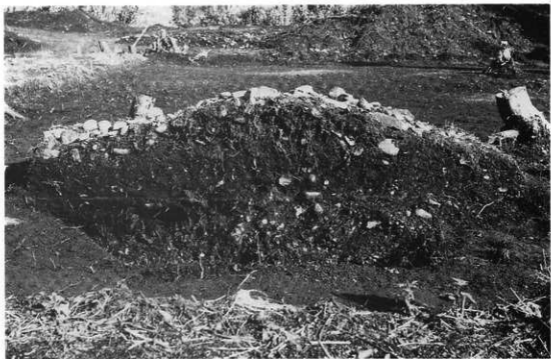


19. H03-02溝

写真図版7：土坑と溝

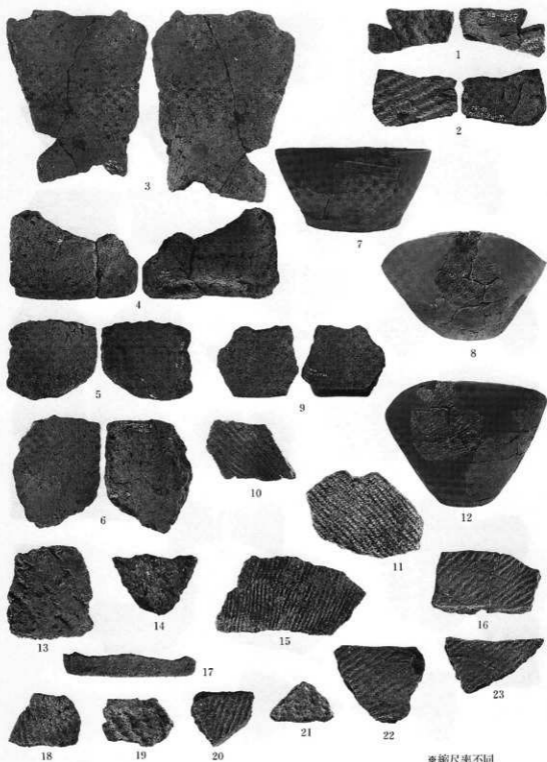


20. 円墳状集石



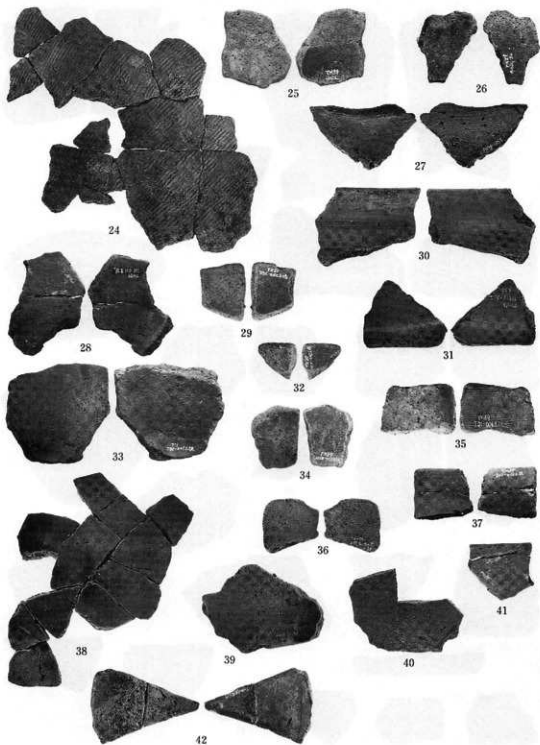
21. 同上半截

写真図版 8 : 集石



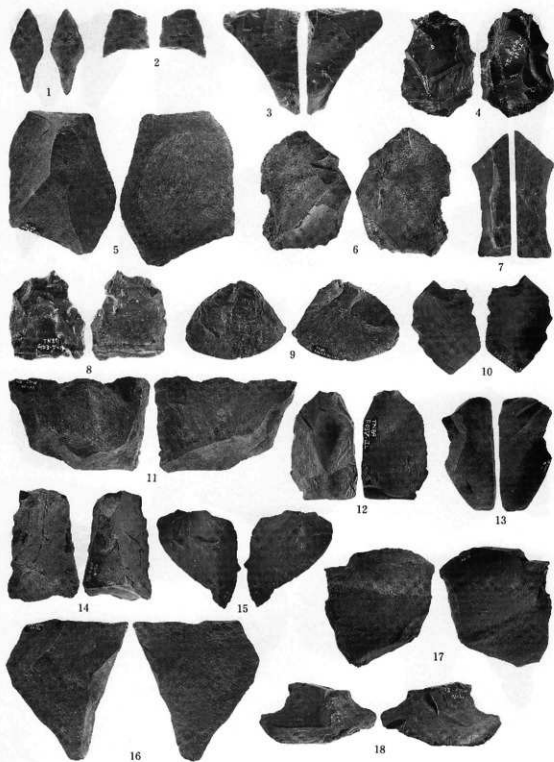
※縮尺率不同

写真図版9：土器写真(1)

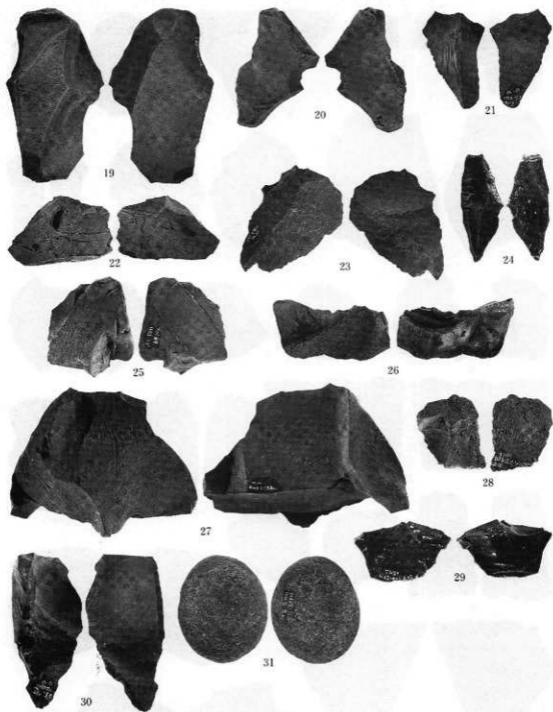


写真图版10：土器写真(2)





写真図版11：石器写真(1)



写真図版12：石器写真(2)

# 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

理事兼 所長	小笠原 喜一		
副所長	高橋 敬明		
〔管理課〕			
管理課長(兼)	高橋 敬明	嘱託	吉田 一男
課長補佐	森岡 陽一	〃	根橋 文一
主事	佐藤 理	運兼 技能師員	佐藤 春男
〔調査課〕			
調査課長	村上 康昭	文化財 専門調査員	佐々木 信一
課長補佐 (第一班)	佐々木 嘉直	〃	小原 眞一
課長補佐 (第二班)	鈴木 恵治	〃	村上 修
主任文化財 専門調査員	小野田 哲憲	〃	酒井 宗孝
〃	三浦 謙一	〃	松本 建速
〃	工藤 利幸	〃	笹平 克子
〃	高橋 与右門	〃	花坂 政博
〃	平井 進	〃	佐々木 務彦
〃	中川 重紀	〃	金子 昭彦
〃	藤村 敏男	〃	濱田 宏造
〃	高橋 義介	期限付専門 職員	鎌田 精勝
文化財 専門調査員	斎藤 實	〃	阿部 邦彦
〃	佐瀬 隆雄	〃	安星 雅之
〃	千葉 博司	〃	引屋 敷学
〃	斎藤 隆幹	〃	鈴木 知己
〃	佐々木 弘均	〃	藤村 隆悟
〃	川村 均行	〃	千葉 博由
〃	鈴木 貞格	〃	熊谷 信一郎
〃	伊東 修	〃	新倉 博英
〃	遠藤 邦雄	〃	山口 聡
〃	齋藤 敏	〃	川村 聡
〔資料課〕			
資料課長	村松 義夫		
主任文化財 専門調査員	田鎖 寿夫		
			八重樫 のり子

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第166集

田中館跡発掘調査報告書

東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査

印刷 平成3年10月25日

発行 平成3年10月30日

発行 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡南村大字下飯岡第11地割字高屋敷185

電話 (0196) 38-9001・9002 FAX (0196) 38-9002

印刷 株式会社 杜陵印刷

〒020 岩手県盛岡市みたけ二丁目22番50号

電話 (0196) 41-8000